東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

欲求不満状況における子どもの期待水準に関する教育心理学的研究：小学生によるP－F スタディ母－子場面の対処方略を中心に

メタデータ	言語: ja
	出版者:
	公開日: 2022-02-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 藤田, 主一
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1442

欲求不満状況における子どもの期待水準に関する教育心理学的研究

── 小学生によるＰ－Ｆスタディ母－子場面の対処方略を中心に ──

藤　田　主　一

東京音楽大学研究紀要　第45集　－2021－

欲求不満状況における子どもの期待水準に関する教育心理学的研究
―― 小学生によるＰ－Ｆスタディ母－子場面の対処方略を中心に ――

藤 田 主 一

1　はじめに

人間は、さまざまな欲求（appetite、desire、need、want、etc）を持ちながら生活しているが、その欲求は個人に共通して生命維持に関わる生理的（一次的）欲求と、個人それぞれが個に応じた人間性を求める心理・社会的（二次的）欲求から成り立ち、両者の性質やメカニズムは異なる。生理的欲求には、空気・水分・食物・睡眠・排泄・休息・性などの現象が含まれ、それらが欠乏し満たされないと生命の危機に陥り、満たされるとそれ以上を求めない。つまり生理的欲求は、①衝動的に現れる（一時性）、②代用満足がほとんど不可能である（非代替性）、③満足、不充足は生命の維持にかかわる（生命直結性）、④文化、種族、時代などの影響を受けずに現れる（普遍性）、⑤過剰の満足を要しない（制限性）、などの特質があり、この欲求を生じさせる原因となるものが、動機（motive）または動因（drive）である。

一方、心理・社会的欲求は、社会的承認欲求、愛情欲求、独立欲求、成就欲求、優越支配欲求などに分類され、個人はそれらが満たされることにより精神的な安定と満足感を得ることができる。たとえば、社会的承認欲求には、①賞賛欲求、②顕示への欲求、③集団所属への欲求、④名誉を求める欲求、⑤業績の承認への欲求、⑥立場や面子を保つことへの欲求、⑦存在価値を求める欲求、などが含まれる。愛情欲求には、、①親子の愛情、②きょうだいの愛情、③友人の愛情、④異性の愛情、⑤社会的コミュニケーションの愛情などが含まれる。独立欲求には、①干渉排除、②責任をもつ、③自主性をもつ、④主体性をもつ、⑤生きがいを感じる、などが含まれる。成就欲求には、①成功感、②自己評価、③自己洞察、などが含まれる。優越支配欲求には、①経済的優越支配、②体力的優越支配、③精神的優越支配、④知的優越支配、などが含まれる（駒崎、1985、1992）。これらの心理・社会的欲求は、乳児期から幼児期、児童期、青年期へと発達するに伴い、その質と量、対人的な方向性が異なること、また個人が生活している社会や文化の影響を受けていることは明らかである。

個人の欲求は、常に満たされ続けているとは限らない。さまざまな生活環境の中で、生理的・身体的な均衡が崩れたり、欠乏状態が長引いたりすることも多い。また、精神的な不安や悩み、ストレスや葛藤（conflict）などに包まれ、そこから抜け切れない時間を過ごすことも日常茶飯事である。欲求不満（frustration）とは、欲求が何らかの障壁によって阻止され、満足されない状態にあることを指している。欲求が阻止されると、個人は好ましくない不快な緊張状態を体

験するが、そこにとどまって生活することはさらなる不快な状態を生み出すことに繋がるため、何とか現状から逃れようとするメカニズムが働くのである。Rosenzweigが提唱した欲求不満耐性（frustration tolerance）は、一種の我慢強さとも関係し、それは発達によって形成され、獲得されていくものである。個人差は大きいが、健康的な適応へ向けて、欲求不満を自らの力で乗り越えられるか否かということになる。

しかし、欲求不満に陥り健康的な適応の確保が難しいと、個人は欲求不満を解消したり軽減したりするため、一時的に無意識的な仕組みを働かせる。これは応急措置的に緊張を緩和する対応であり、一般に適応機制（adjustment mechanism）と呼ばれるもので、Freudによる防衛機制（defense mechanism）の考え方もこの中に含まれる。適応機制の中でも感情的・反社会的であり、問題行動を呼び起こす可能性が高いものは攻撃機制である。攻撃（aggression）は、自分を欲求不満にさせた対象者へ直接向ける場合、無関係な第三者や社会へ向ける場合、あるいは自分自身へ向かう自罰的行動などがある。暴力や暴言、犯罪やテロ、自傷や自死へ進んでしまうことも見受けられる。Dollard（1939）による「欲求不満－攻撃仮説」の根拠となるものである。

２　投映法とＰ－Ｆスタディ

投映法（projective method）は、比較的あいまいな絵や図形、文章などの刺激に対する受検者の自由な反応内容から、個人のパーソナリティ像を描き把握する検査である。投映法のなかでも、ロールシャッハ・テスト（Rorschach Test）やTAT（Thematic Apperception Test）などは、検査手続き、つまり実施法や分析法、整理法や解釈法が複雑であり、検査者に対して高度な専門性が要求される。また、当該投映法自体に学派が存在する場合もあり、それぞれの立場からの手続きをより多面的にしている。投映法に属するＰ－Ｆスタディ（The Picture Frustration- Association Study for Assessing Reactions to Frustration）は、Rosenzweigによって公刊された。Rosenzweigは、もともと精神分析（psychoanalysis）の視点から、行動生起を測定する用具としてＰ－Ｆスタディを考案したと言われている。Rosenzweigは、検査が内在するパーソナリティの反応水準（reaction level）について、SCT（Sentence Completion Test）が意見水準（opinion level）を表現しているのに対し、ロールシャッハ・テストやTATなどは暗黙水準（implicit level）になると述べている（Rosenzweig、1950）。意見水準は、受検者が自己報告式の質問紙でなされるような自己批判的な意識を通した回答であり、暗黙水準は、パーソナリティの潜在的あるいは無意識的な水準を反映するものである（秦、2010）。

これに対して、Ｐ－Ｆスタディはそれらの手続きがどちらかといえば制限的な枠組みの中で実施され、結果の処理（スコアリング、整理法など）や分析、解釈などについても比較的客観的に行うことができるため、制限付きの準投映法（semiprojective technique）とも言われる。また、検査は欲求不満場面に限定されているため、その意味で制限投映法（準投映法）と認められる。

P－FスタディはRosenzweigの母国アメリカだけでなく、日本、フランス、ドイツ、イタリア、ポルトガル、スペイン、スウェーデン、インドをはじめ複数の文化圏で標準化が行われており、各地域において臨床的場面で、そして研究上の用具として広く利用され、その学問的価値は極めて高いものがあると評価されている。すなわち、検査者から見た利点や検査上の目的がはっきりしていることに加え、心理臨床におけるさまざまな場面での利便性が高いことが挙げられたことによる（藤田、1990、1991）。

３　Ｐ－Ｆスタディと攻撃性

Rosenzweigの基本理論は、いわゆる個性的事象界（idioverse）と呼ばれる自我の独自性や力動性を主観的な反応から捉えることで、個人のパーソナリティを理解する立場にあったといえる。その際に問題になるのは、この主観的な反応を客観的なベースに置き換える指標である。P－Fスタディは、Rosenzweigのこうした考え方を基本に構成された。

Rosenzweigは、1945年にP－Fスタディ成人用、続いて1948年に児童用、1965年に青年用を公刊した。また、1978年に基本マニュアルを公刊している。P－Fスタディ日本版は、成人用が1957年、1964年（改訂版）、2020年（第Ⅲ版）、青年用が1987年、児童用が1956年、1964年（改訂版）、2006年（第Ⅲ版）がそれぞれ三京房から発刊されている（林、1985；秦、1992；秦・安井、2013；秦他、2020）。

P－Fスタディは、日常生活において誰もがごく普通に経験する24種類の比較的軽い欲求不満場面で構成され、受検者の主観的な反応から、個人の力動的なパーソナリティ像が得られるように工夫されている。欲求不満場面は２つの刺激材料、つまり漫画風の絵画刺激と左側人物（阻碍者、Frustrater）の言語刺激から成り、右側人物（被阻碍者、Frustratee）の反応をとおして、受検者自身の内面が投映される。絵画刺激に登場する人物の容貌や表情が省略されているのは、その容貌や表情の情報から誘発される反応を押さえる意図がある。それは、SCTが意見水準（opinion level）、ロールシャッハ・テストやTATなどが暗黙水準（implicit level）を表現しているのに対し、P－Fスタディのパーソナリティ水準は、顕現水準（overt level）に近いと仮定する。これは、客観的な他者判断であり、日ごろより類似場面での行動が推測できる。それは日常の生活場面で実際に行なっている行動に対する反応であり、受検者は日常生活の実際場面に対応するような観察的な行動をするからである（秦、2010；秦他、2020）。全24場面は、大きく自我阻碍場面（Ego-Blocking Situation）と超自我阻碍場面（Superego-Blocking Situation）に二分でき、前者は人為的あるいは非人為的自我が阻碍されるもの、後者は他者からの非難・詰問により超自我が阻碍されるものである。

P－Fスタディの各場面に対する反応について、Rosenzweigは２次元のカテゴリーからの分類を試みている（Rosenzweig、1978b、1981；林他、2007）。すなわち、欲求阻止状況において自我の攻撃方向を問題にするアグレッション方向（Directions of Aggression）と、反応展開

を問題にするアグレッション型（Type of Aggression）がそれである。さらに、従来は外罰方向（Extrapunitive）、内罰方向（Intropunitive）、無罰方向（Impunitive）と表記していたものを、アグレッション方向は他責（Extraggression, E－A）、自責（Intraggression、I－A）、無責（Imaggression、M－A）の3方向に変更した。アグレッションの型は障碍優位（Obstacle-Dominance, O－D）、自我防衛（Ego-Defense, Etho-Defense, E－D）、欲求固執（Need-Persistence, N－P）の3型に分類される。これらの相互の組み合わせにより、基本的に9種類の評点因子（Scoring factors）の成立が可能である。ここでいう9種類の評点因子とは、E′（他責逡巡、Extrapeditive）、E（他罰、Extrapunitve）、e（他責固執、Extrapersistive）、I′（自責逡巡、Intropeditive）、I（自罰、Intropunitive）、i（自責固執、Intropersistive）、M′（無責逡巡、Impeditive）、M（無罰、Impunitive）、m（無責固執、Impersistive）を指し、Eと I は、それぞれEとIの変型である。そして、24場面をとおしての評点因子の出現頻度ならびにその特徴、社会的適応の指標となるGCR（集団順応度：Group Conformity Rating）、検査中における被検者の反応の変化を見る反応転移（Trends）、検査の所用時間、質疑、検査中の行動観察などを総合して、個人のパーソナリティ像を浮き彫りにするところに、P－Fスタディの心理検査としての特徴が認められる。表1は、P－Fスタディのスコアリング要素をまとめたものである（秦他、2020）。

表1　P－Fスタディのスコアリング要素（Rosenzweig、1978a；秦他、2020）

	アグレッション型		
アグレッション方向↓	障碍優位（O－D） （Obstacle-Dominance）	自我防衛（E－D） （Ego-Defense） （Etho-Defense）	欲求固執（N－P） （Need-Persistence）
他　責（E－A） （Extraggression）	他責逡巡（E′） （Extrapeditive） 欲求不満の障害を強く指摘して失望、不快、不満などを表明する	他　罰（E） （Extrapunitve） 周囲の人や物に責任を負わせて非難や敵意を向ける。 E：Eの変型で、自分に向けられた罪を積極的に否認する。	他責固執（e） （Extrapersistive） 欲求不満事態の解決を他の人に頼り、他者に欲求充足を求める。
自　責（I－A） （Intraggression）	自責逡巡（I′） （Intropeditive） 欲求の阻碍がなかったとか、ある意味ではかえってよかったとみなす。ときには自分が他の人に欲求不満を起こさせたのではないかと当惑する。	自　罰（I） （Intropunitive） 自分自身に責任を感じて自己非難や謝罪する。 I：Iの変型で、自分の責任は認めるものの、言い訳によって責任を逃れようとする。	自責固執（i） （Intropersistive） 罪障感から償いを申し出るとか、みずから問題解決をはかるために努力する。
無　責（M－A） （Imaggression）	無責逡巡（M′） （Impeditive） 欲求不満事態についてほとんど障碍がなかったように、軽視する。	無　罰（M） （Impunitive） 欲求不満に対する自他の責任追及をせずに、欲求不満を不可避の事態とみなし、不満の原因になった人を許容する。	無責固執（m） （Impersistive） 時間の経過や周囲の状況から見て自然に問題が解決することを期待する。忍耐するとか、社会的慣習に順応する。

また同時に、秦他（2020）では、11個の評点因子を以下のように定義している。

(1) E′（他責逡巡：Extrapeditive）：不快や不満の表明であり、相手に対する攻撃を制止した結果であるという見方もできる。

(2) I′（自責逡巡：Intropeditive）：フラストレーションに対して自己の責任は認めるが、超自我の働きが強いために、状況に対してきちんと対応できなくて当惑や狼狽している反応である。また、ときにはフラストレーションの経験がかえってよかったという反動形成とみられる反応も含まれる。

(3) M′（無責逡巡：Impeditive）：フラストレーションに対して軽視しようとする傾向を示している。その背景には、相手に対する思いやりによる場合や、ときには無関心とか、強がりや負け惜しみをうかがわせるような場合もある。

(4) E（他罰：Extrapunitve）：相手に対する直接的な攻撃的、主張的反応である。ここには相手を非難攻撃する敵意的な意味での攻撃だけでなく、正当な自己主張的な反応も含まれるので、それらを区別しながら解釈しなければならない。特に前者では、（適応機制）の投射の機制が働いているとみられる。

(5) E：相手から自己の非を指摘されたり責められたりしたときに、自分の責任を否定する反応である。ここには自分の権利や正当性を主張する反応も含まれるので、一概に好ましくない反応とみるべきではない。

(6) I（自罰：Intropunitive）：フラストレーションの原因が自分にあることを認める反応であり、多くの場合は謝罪の形をとっている。だたし、謝罪の表現によって罪悪感が強いのか、その場しのぎで対処しようとしているのかなどを区別してみていく必要がある。また、超自我阻碍場面で謝罪の反応が出現することはごく当然のことであるが、これが自我阻碍場面で見られたときは、自罰の傾向が一層強いとみることができる。

(7) I：自己の責任は一応認めるものの、言い訳によってその責任をできるだけ軽くしようとする自己弁護の反応であり、いわば素直に自己の非を認めたくないという気持ちの表現である。また、言い訳に内容が合理的か非合理的かによって被検者の社会適応性を判断する参考になる。

(8) M（無罰：Impunitive）：基本的に相手を許容する反応であり、相手を受け入れるだけの寛容さの程度を示すと考えられる。ただし、仕方なしに受け入れるのか、あるいは積極的に受容しようとしているのかについて、反応の表現内容に注目することが望ましい。

(9) e（他責固執：Extrapersistive）：問題解決を他者に求める依存的傾向だけでなく、自らの欲求充足を強く求める傾向も示している。相手に対する強い欲求は、しばしば相手に対する攻撃という形を取りやすいので、Eと関連して検討することが望ましい。

(10) i（自責固執：Intropersistive）：自ら積極的に問題解決しようとする反応である。超自我阻碍場面では償いをするという罪悪感に関係し、自我阻碍場面では自立的解決の意味が含まれているので、両者を区別してみていくことが必要である。

(11) m（無責固執：Impersistive）：相手の指示や規則などを順守する社会的順応性と関係している。一般的には現実的な見地から、社会的に健全な対処と見られるが、これが過剰になると自主性が乏しいとか、過剰適応という見方ができる。

P－Fスタディが心理検査としての有効性を発揮するためには、まず統一的なスコアリング方法が確立していることが必要である。P－Fスタディのスコアリングにおける基本的な原理は、まず、①語義的水準の順守、②吸収の原理、が取り上げられる。①語義的水準の順守とは、記述された言葉の常識的な意味に従ってスコア（言葉の背後にあると思われる感情などを深読みしない、など）することを指している。②吸収の原理とは、慣用的で導入的な反応は、後に続く主要な反応に吸収されるのでスコアしないことを指している。また、『P－Fスタディ解説（2006年版）』（林他、2007）、『P－Fスタディ解説（2020年版）』（秦他、2020）に掲載されているスコアリング例を参照する場合は、反応分類の正確さと各因子の意味を明確にする目的があることを理解しなければならない。すなわち、同じ言語反応でも所与の場面（自我阻碍場面、超自我阻碍場面）によって異なる因子にスコアされるからである。さらに、無記入、場面の誤認、身体表現（例：泣く）、あいまいな反応語などはU（unscoable）とする。Uはスコア不能ということであり、その対応については、必要に応じて質疑段階（ロールシャッハ・テストの質問段階と同様）を設けて確認すること、ただし初発反応を優位にスコアすることは普遍であり、質疑段階で得られた情報は括弧にしてスコアすることが求められている。

スコアリング結果を整理する場合、①GCR（集団順応度、ロールシャッハ・テストのP反応に該当）の程度、②カテゴリーごとのプロフィール、③超自我因子の出現頻度、④反応転移の有無、⑤当該データと標準値（標準偏差を含む）との関係、などの観点に注意する必要がある。

P－Fスタディは、心理検査として成立するために、検査の信頼性（reliability）、妥当性（validity）、弁別性（discriminability）などの要件が客観的に満たされた標準化（Standardization）の手続きを経ている。検査の構成要件が確立した場合、P－Fスタディでは、検査の実施法と整理法、解釈法へと合理的に進むように工夫されている。解釈法には、基本的な被検者の情報を記述した後、形式分析（formal analysis）として、①GCR、②プロフィール、③主要反応、④超自我因子、⑤反応転移などを記述する。さらに、内容分析（content analysis）の役割として、①補充的役割（supplementary）：因子の表現内容や場面と反応との関係、②補完的役割（complementary）：形式分析とは別の反応表現や内容による情報、などを提供することで、豊かな解釈へ導くことができる（秦、2010、2019；秦他、2020）。

4　P－Fスタディと親子関係

P－Fスタディは、投映法検査の代表的な1つであり、これまでにさまざまな角度から研究されてきた（秦、1987、1993、1996、2007）。全24場面に対する受検者の主観的な反応から、その個人の力動的なパーソナリティ像を描けるように工夫されているが、漫画風な絵画刺激と左

側人物（Frustrater）の言語刺激がセットされているため、場面ごとの状況決定因（situational determinant）が強く、反応の自由度が低くなることも事実である（藤田、1995）。すなわち、標準法で実施する場合、１場面1反応で記述した文字表現が唯一の手がかりであるため、その評点組織が実際の行動を予測しにくいこと、検査自体の簡便さに比較して解釈が表面的になりやすいとの指摘である。各場面の文字表現は、内的プロセス（internal process）を経過した後の最終反応を仮定するが、その確認は難しい。たとえば、不明確語や言外感情、反応水準の領域などは検査後に追跡回答を求めなければならない。基本的には24場面全体を総合的に捉えることで乗り越えていくが、それは従来のＰ－Ｆスタディが想定していない展開である（藤田、1997、1998）。

Ｐ－Ｆスタディ研究の新しい方向性を追究するなかで、場面認知の相違による反応水準の効果を研究することは、大変重要な課題である。所与の欲求不満事態と現実経験との類似性は、その反応に影響を与えるだろうし、欲求不満を生起させた相手を誰と認知したかによっても反応の意味は異なってくる。Ｐ－Ｆスタディの絵画刺激（言語刺激を含めて）として登場する２人の人物の人間関係の認知は、確かに反応する場合の手がかり要素を多く持っている。人間は誕生から現在まで、そのときどきにおいて実にさまざまな地位を占めていることは言うまでもないことである。親であっても子どもであっても、それは例外ではない。それらの人びとは、それぞれの地位や役割に応じた行動や態度を求められることが多く、反対に制限や禁止を受けることも顕著である（藤田、1995、2020）。

久芳（1959）は、Morgan（1956）が考案した罰場面指数（The Punishment Situation Index：PSI）によって、母親－子ども関係を罰の方面から研究するために、Ｐ－Ｆスタディの処理方法（アグレッションの方向と型）を用いて検討した。研究対象者は小学校４～６年生およびその母親各40名である。その結果、母親－子ども間における罰場面を攻撃（アグレッション）の方面から把握するには、投映法的方法では不十分としながらも、いくつかの興味深い点が指摘された。それらは、以下のようにまとめられる。

1）母親は、子どもが母親に向けるよりも、子どもに対して、より多くの攻撃的方向（他責的）をとる。
2）母親についての子どもの考え方は、母親自身についての考え方よりも、より攻撃的方向をとる。子どもは、母親以上に罰に対して敏感である。
3）母親は、子どもよりもＯ－Ｄ（障碍優位）、Ｎ－Ｐ（欲求固執）の型が多く、子どもは母親よりもＥ－Ｄ（自我防衛）の型が多い。
4）多くの母親は、全般的に要求阻止の立場にあり、子どもの行動を否定することが多い。

原野・江川・渡辺（1970）は、親や一般人が欲求不満の原因になるときは、教師が原因になるときよりも、はるかに外罰（外責）的態度を示すことを明らかにしている。

秦（1974）は、Ｐ－Ｆスタディ児童用を小学校３年生、６年生、中学校３年生の計232名に集団で実施し、標準法での記入が終了した後、場面ごとに左側人物と右側人物との関係を再記入

させた。その結果、全体的に見て比較的人物認知の一致率が高い場面と、人物認知の異なる場面とが混在した。相手（左側人物）を家族と認知する場合は、相手を他人と認知する場合よりも他責的反応を示しやすいことを指摘し、スコアリングや解釈をするときには人物認知と言語反応とを比較しながら検討する必要性を強調している。

伊藤（1979）は、子どもの反応とそれについての母親の予測反応を小学校4年生の男女とその母親の計41組に求めた。その結果によると、アグレッションの方向で抽出された相互の反応（子どもがある方向の反応をしたとき、それと一致する評点の予測反応が母親によってなされる）を指標とした場合では、子どもの性別に関わりなく、平均60％前後で一致していた。これらのことから、母親の予測反応の特徴は、子どもが現実の欲求不満場面で示す反応を反映するものであると考えられた。

藤田（1986）は、母親から見た子ども像を把握することを目的に、子どもの欲求不満に対する対処方法、母親が子どもに何を期待し何を期待しないのかといった役割期待の方向差、加えて日常の母－子関係の具体像をＰ－Ｆスタディの場面をとおして明らかにした。研究対象者は小学生を持つ母親81名である。研究材料に用いられたのは、Ｐ－Ｆスタディ児童用から母－子の対話場面と想定された10場面である。子どもの反応を3つの水準で記入する教示が与えられた。すなわち、①一般的反応水準、②母親が期待する反応水準、③母親が期待しない反応水準である。その結果、概ね次の諸点が明らかになった。

1）特定の評点因子が、３反応水準とも出現しない場面が認められた。
2）特定の評点カテゴリー（Scoring Categories）が、3反応水準ともに出現しない場面が認められた。
3）攻撃の方向および型から、子どもの一般的な反応と、母親の子どもに対する役割期待との関係が明らかになった。
4）理論上は同一評点に分類されるが、３反応水準に分かれる反応語が認められた。
5）欲求不満事態では、子どもは必ずしも言語反応するとは限らない事実が認められた。

上記の諸結果から、標準法による子どもの反応と、母親の具体的な子ども像とは一致する傾向にあることが認められた。また、役割期待の観点からは、概して母親が期待する（好まれる）方向は自責（Ｉ－Ａ）反応あるいは無責（Ｍ－Ａ）反応であり、反対に、母親が期待しない（好まれない）方向は、他責（Ｅ－Ａ）反応であることが明らかになった。このような具体的事実は、Ｐ－Ｆスタディを標準法で実施する際の基本的態度の必要性の指摘（林、1985）とともに、臨床的に利用する場合において重要な知見を提供するものである。

このような諸結果から、子ども自身が描く母親像としては、概して母親に好まれる方向が無責あるいは自責方向（型は3方向に分散）、概して母親に好まれない方向は他責方向で自我防衛型であることが明らかになった。こうした事実は、母親による同様の研究と併せて、Ｐ－Ｆスタディによるパーソナリティの理解、さらに母子関係を臨床的に解釈する場合に極めて有意味な情報を与えるものである（藤田、2020）。

5　研究の目的

Ｐ－Ｆスタディは、投映法の原理に基づいて受検者自身の反応水準を測定する心理検査であるが、相手側の内面を推測する方法を採用することで、受検者に潜在するパーソナリティ像を捉えることができる。これまでの社会的経験（Social experience）を用いるとはいえ、他者は何を考えているのかを推測することは、ある意味で「心の理論」（Theory of Mind）に類似した側面とも考えられる。実際、母親の子どもに対する役割期待と、子どもの母親に対する被役割期待との関係を比較検討することは、新しい研究方法にほかならない。

本研究は、これらの問題意識を踏まえて、母親に対する子どもの認知像を期待水準の2方向に求めるものである。これは、CCP（A Test for Measuring Children's Cognition of Parents）による親子関係理解（林・一谷・小嶋、1963）の目的をＰ－Ｆスタディの場面をとおして検討するとともに、子ども自身がどのような役割期待を自覚しているかを知ろうとするものである。つまり、子ども自身（本研究では小学生）を対象に、①子ども自身の反応、②母親は子どもにどのような反応を期待しているか、③母親が期待していない反応とはどのようなものかを問題にした。回答内容は、標準法に照らしてスコアリングを試み、可能な限り母親自身による期待水準の結果（藤田、1986）、中学生を対象にした期待水準の結果（藤田、2020）と比較、検討して、相互の役割を明らかにすることを目的にするものである。

6　研究の方法

（1）研究対象者

研究対象者は、埼玉県内の市立Ａ小学校５年生５クラスの児童165名（男子83名、女子82名）である。調査は、2019（平成31）年３月に行われた。調査実施時の平均年齢は、男子11.50歳（11歳０ヵ月～11歳11ヵ月）、女子11.48歳（11歳０ヵ月～11歳11ヵ月）であった。なお、この対象者数は、回答への非同意（白紙、回答拒否）を除いた人数である。

（2）研究の倫理的配慮

本研究の倫理的配慮であるが、調査の実施等については、日本体育大学倫理審査委員会へ「人を対象とする研究倫理審査申請・研究計画書（研究課題名：投映法を用いた親子関係の研究）」ならびに「説明書」「同意書」を提出した。後日、審査の結果、「審査結果通知書」により承認された（承認番号：第019－H150）。研究対象のＡ小学校へ調査用紙等の一式を持参して依頼、同小学校の校長ならびにクラス担任に説明し調査の実施について同意を得た。具体的には、ホームルーム後の空き時間に、各クラスで「調査の概要」を説明し、「同意説明文書」を読み上げる方法で依頼した。また、同意する者のみ調査用紙に記入すること、同意しない者については、白紙（回答拒否）で構わない旨を伝えた。

（3）研究材料

本研究で用いた研究材料は、P－Fスタディ児童用（第Ⅲ版、2006）24場面の中から、絵画刺激と言語刺激の内容、および従来の研究報告を考慮して選択された母－子の対話場面と想定できる9場面である。最終的に、この9場面を研究材料として選択する過程において、秦（1974）や藤田（1986、1989）の研究などを参考にしている。そこでは、全24場面について左側人物は右側人物から見てどのような関係（例：父、母、兄弟姉妹、教師、友人、他人など）になるかを場面認知の出現率の上から検討された。秦や藤田の研究で用いられた児童用場面は、児童用改訂版（1964）であるため、絵画刺激（左側人物の服装、家具や玩具など）が今日の生活習慣と相違する場合がある。例えば、左側人物（母親）の服装は、改訂版（1964）では和服（着物の上に割烹着などを着用）であるが、第Ⅲ版では洋服（スカートを着用）姿のタッチで描かれている。これは、『P－Fスタディ解説（2006年版）』（林他、2007）の説明によると、「P－Fスタディ児童用日本版の初版（1955）が作成された当時は、アメリカと日本の生活習慣等の違いがあったため、一部の場面内容の変更を含んで、全面的に日本風に描画内容が書き替えられている。今回の児童用の改訂（2006）にあたって、初版の日本版を参考としながらも、できるだけアメリカ（原図）版に近い絵になるように意図して全面的に描き替えた。第Ⅲ版が最終決定される前に、P-Fスタディの原著者であるローゼンツァイクの承認を得た」という理由に基づいている。児童用第Ⅲ版は、原点回帰という趣旨から、この点に改良が加えられたので、この第Ⅲ版による新たなデータの蓄積が求められる。

ここで、本研究で用いられた児童用第Ⅲ版の全24場面を、左側の欲求不満に陥れる人（阻碍者：Frustrater）と、右側の欲求不満に陥れられる人（被阻碍者：Frustratee）に分けて示すと、おおよそ表2のようなパターンになるだろう。

表2　阻碍者の年齢水準・性別と、被阻碍者の性別によるP－Fスタディ児童用場面（第Ⅲ版）の分類

阻碍者（左側人物：Frustrater）		被阻碍者（右側人物：Frustratee）	
年齢水準	性　別	男　子	女　子
成　人（年配者）	男　性	11　13　14	5
成　人（年配者）	女　性	④　⑮　⑰　⑲　22 ㉓　24	①　⑦　⑩　⑯
仲　間(同年齢者)	男　性	6　9　12　20	3
仲　間(同年齢者)	女　性	2　18	8　21

注1）表中の数字は、児童用場面（第Ⅲ版）の場面番号である。また、○印がついている数字は、本研究で用いられる場面を指している。
注 2）年齢水準は、右側人物と比較してのものである。
注 3）場面6は、左側人物の年齢水準に対して「年上の子」「友人」という人物認知が高率を占めていることから、成人とは考えにくいので「仲間」として分類した。
注 4）場面17は、人物認知を「両親」とするのが一般的だが、言語刺激の内容を検討した結果「成人・女子→母」として分類した。

(4) 手続き

調査はクラス単位で実施し、その基本的な手続きは通常の標準法に準拠している。調査用紙はＡ３判１枚の表裏両面を使用したが、表紙（Ａ４判１枚）には「フェイスシート（学年、年齢、性別をチェック）」と調査の「説明」が印刷してある。残りのＡ４判３枚には、各ページに３場面ずつの絵画刺激と質問文が印刷されている。

各場面の記入に際して、絵画刺激（原図版）の右横に、①一般的な答え（子どもの答え）、②母親が期待する答え、③母親が期待しない答え――の回答欄を設け、研究対象者（小学校5年生）に率直な回答を求めた。表紙の「説明」に記載されている具体的な教示は、以下のように児童用第Ⅲ版の「例題」を用い、漢字にはすべてルビが振られている。調査用紙を1枚ずつ配布し、全員に行き渡ったのを確認した後、教示文をゆっくり読み上げた。

図1　Ｐ－Ｆスタディ（児童用）の例題

「次の絵を見てください。「この絵はあまり上手ではないね。」と母親が子どもに話しかけているところです。これはお母さんと子どものお話しです。さあ，この子どもは，お母さんに何と言い返すでしょうか。この子どもの答えを①の場所に書いてください。

そのとき，お母さんが期待する答え（お母さんが喜んだり，褒めてくれたりする答え）は何ですか。その言葉を②の場所に書いてください。

それでは，お母さんが期待しない答え（お母さんが怒ったり，お母さんに叱られたりする答え）は何ですか。その言葉を③の場所に書いてください。

ページをめくると，このような絵が９枚ありますから，①②③のあいているところに書いてください。思いつくままでよいですから，自由に書いてください。」

教示終了後、場面１から順次回答を求めたが、記入方法への質問等がある場合には、いつでも自由に発言することが認められた。

なお、本研究の対象になるＰ－Ｆスタディ母－子場面とその言語刺激は以下のとおりである。言語刺激の漢字にはルビが振られている。また、行替え等には半角の空欄を設けた。

場面１「おかしは兄(にい)さんに あげたから もう一(ひと)つも ありませんよ。」

場面４「困(こま)ったわね。その自動車(じどうしゃ) 私(わたし)には直(なお)せないわ。」

場面７「あなたは 悪(わる)い子(こ)ね。私(わたし)の花(はな)を つんだりして。」

場面10「悪(わる)いことをした ばつに外(そと)に閉(し)め出(だ)して悪(わる)かったわね。」

場面15「けがは しなかった？」

場面16「あなたのボールを とったりして この小(ちい)さい子(こ)は いけないわね。」

場面17「出(で)かけるから寝(ね)ていてね。」

場面19「また おねしょ したのね。小(ちい)さい 弟(おとうと) より だめじゃないの」

場面23「おつゆが冷(さ)めてしまって悪(わる)かったわね。」

上記９場面の内、場面１、場面４、場面10、場面15、場面16、場面17、場面23は自我阻碍場面（Ego-Blocking Situation）、残りの場面７、場面19は超自我阻碍場面（Superego-Blocking Situation）である。

児童用改訂版（1964）では、母－子場面と想定される刺激が10場面であるが、児童用第Ⅲ版では９場面に減少している。それは場面14について、『解説書』（林他、2007）によれば「場面14は、初版の日本版では左側の人物が「女の人」になっているが、原図版では「男の人」である。第Ⅲ版では、原図版にならって「男の人」に変更した」と説明されている。したがって、本研究では、場面14を除く９場面を母－子場面として採用した（図２）。

場面1

場面4

場面7

場面10

場面15

場面16

場面17

場面19

場面23

図2　P－Fスタディ（児童用）の母－子場面

7　結果と考察

本研究の対象者(小学校5年生男女)から得られたＰ－Ｆスタディ児童用(第Ⅲ版)に対する「本人の反応水準（一般水準)」、「母親が期待する反応水準（期待水準)」、「母親が期待しない反応水準（非期待水準)」の記述内容は、『Ｐ－Ｆスタディ解説（2020年版)』（秦他、2020)に依拠して評点（スコアリング)ならびに解釈が行なわれた。なお、ここでは全研究対象者の評点因子および評点カテゴリーの出現率を母－子の9場面ごとに算出した。また、いわゆる不明確語（未記入、場面の誤認、泣くなどの動作語)などは、Ｕ反応として一括処理した。以下、男女を混合した全体の反応傾向ならびに９場面ごとの反応傾向を、スコアリング結果の比率に基づいて、特に「期待水準」「非期待水準」の特徴的な諸点を中心に考察する。

(１)母－子全９場面の反応傾向について

表３は「Ｐ－Ｆスタディ児童用の母－子場面（全９場面)における評点因子の出現率」について、表4は「評点カテゴリーの出現率」について、「一般水準」「期待水準」「非期待水準」の結果を示したものである。また、図３および図４は、それらを視覚的に図示したものである。

表3　　Ｐ－Ｆスタディ母-子場面（全９場面)における評点因子の出現率（%）

評点因子	一般水準			期待水準			非期待水準			有意差
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	(全体)
E'	10.0	12.7	11.3	0.7	0.2	0.4	5.6	6.2	5.9	**
E(E)	22.8	16.6	19.7	0.7	1.7	1.2	63.6	63.8	63.7	***
e	9.2	6.2	7.7	1.8	1.6	1.7	20.7	20.7	20.7	***
I'	3.3	5.0	4.2	7.1	7.5	7.3	1.5	1.4	1.5	**
I (I)	16.7	18.6	17.6	16.2	21.7	19.0	0.9	1.9	1.4	***
i	1.5	3.2	2.3	18.1	15.2	16.7	0.0	0.5	0.3	***
M'	10.4	10.0	10.2	12.9	13.5	13.2	0.5	0.8	0.6	**
M	12.9	16.5	14.6	24.0	22.8	23.4	2.0	1.1	1.5	***
m	8.5	7.6	8.0	13.9	13.1	13.5	0.5	0.5	0.5	**
U	4.8	3.7	4.2	4.6	2.6	3.6	4.7	3.0	3.8	

** $p<.01$,　*** $p<.001$

表4　　Ｐ－Ｆスタディ母-子場面（全９場面)における評点カテゴリーの出現率（%）

評点カテゴリー	一般水準			期待水準			非期待水準			有意差
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	(全体)
E－A	41.9	35.5	38.7	3.1	3.5	3.3	89.9	90.8	90.3	***
I－A	21.5	26.8	24.1	41.4	44.5	43.0	2.5	3.9	3.2	***
M－A	31.8	34.1	32.9	50.9	49.5	50.2	2.9	2.4	2.7	***

O－D	23.8	27.8	25.8	20.7	21.2	20.9	7.6	8.5	8.0	***
E－D	55.0	53.9	54.5	47.6	52.5	50.0	70.9	69.6	70.2	***
N－P	16.4	14.6	15.5	27.2	23.7	25.5	16.9	19.0	17.9	***
U	4.8	3.7	4.2	4.6	2.6	3.6	4.7	3.0	3.8	***

*** $p < .001$

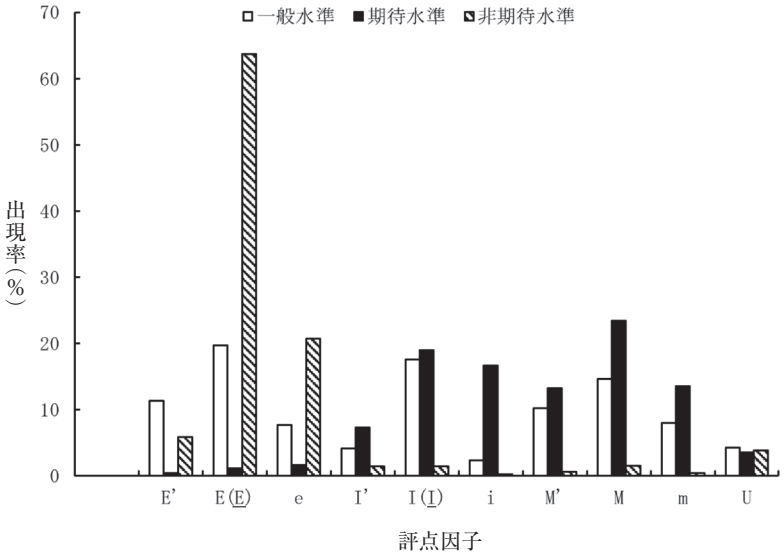

図３　Ｐ－Ｆスタディ母－子場面（全９場面）における評点因子の出現率

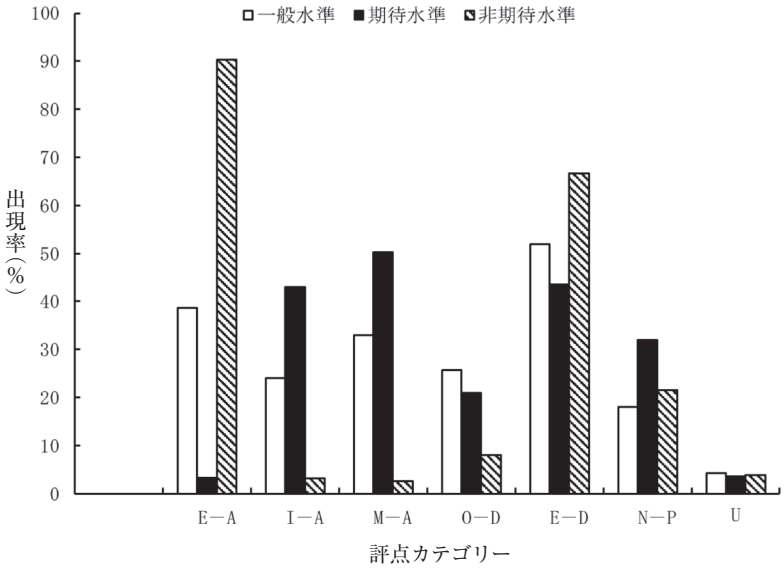

図４　Ｐ－Ｆスタディ母－子場面（全９場面）における評点カテゴリーの出現率

統計処理の段階において、表３ならびに表４の有意差検定には、カイ二乗検定を用い（表５以降も同様である）、評点因子ならびに評点カテゴリーごとの「一般水準」「期待水準」「非期待水準」について、男女を合計した全体間の比率を基に実施した。例えば、表３の評点因子「E'」についてカイ二乗検定を行ったところ、「一般水準」「期待水準」「非期待水準」の出現率に有意な差が認められた（χ^2=10.099, df=2, p＜.01）ことを意味し、「＊＊」の記号を付した。

表３と図３、表４と図４からも理解できるように、全体的に見て、子ども（ここでは小学校5年生）が自認する母親の期待水準は、アグレッション方向では有意に無責（M－A%）で自責（I－A%）であり、全体の93.2%であった。これは、同様の手続きで実施した中学2年生男女の結果（96.4%）と類似である（藤田、2020）。無責（M－A%）反応は、子ども自身が欲求不満に陥れられたとき、相手（ここでは母親）を許容したり、我慢したりして規則や社会的習慣に従う反応である。子どもは、日常生活をとおして母親が自分へ向ける期待をそのような種類のものであると認識し、その行為をすることが母親に喜ばれる役割であろうと理解している。自責（I－A%）反応が欲求不満の原因を自分の責任に帰する反応であると考えれば、子どもは母親が謝罪やそれを踏まえたさらなる努力という形で、将来への決意を求めているのであろうと考える。いわば母親が好む理想的な子ども像（いわゆる社会的望ましさ）を演出していることになると思われる。自罰「I」や自責固執「i」の比率はこの傾向の高さを物語り、一方的に与えられた欲求不満への解決場面に対して、自己非難や自己反省を演じて切り抜けることが、自分に対する母親の期待感と一致していると解釈するのであろう。

これに対して、全体的に見た場合、子どもが自認する母親が期待しない反応水準（非期待水準）はどのような傾向だろうか。第一の特徴は、アグレッション方向が他責（E－A%）反応で有意に全体の90.3%を占め、期待水準の反応（3.3%）と歴然とした相違を表出している点である。他責反応は、欲求不満の原因を他者（ここでは母親）や周囲の他者に帰属させるものであるから、子どもが母親などに対して「E（E）」のような言動を行うとすれば、それは母親にとって最も期待とかけ離れた反応であることを十分に承知している。さらに、これも特徴的と思われるが、他責固執反応「e」のように、母親に対して解決を要求したり依存したりすることも決して望ましい方向であると考えていない。いずれにしても、子どもが捉える母親の期待水準と非期待水準は、全体傾向としてかなり極端な二極分化の様相を示唆している。

（２）母－子各場面の反応傾向について

次に、母－子９場面のそれぞれの結果と、その特徴について考察する。

１）場面１

場面１は、自我阻碍場面である。お菓子を探していた子どもが、母親から一方的に「お菓子は兄さんにあげてしまった」ことを言い渡される。表５は、一般水準と期待水準、非期待水準に関する評点因子の出現率、表６は個々の評点（スコア）をアグレッションの方向と型（評点カテゴリー）に分類してまとめたものである。子どもは欲求不満に陥れられた状況を解決していく際に、

母親として描かれた左側人物に対するさまざまな思いを想起し、その場に適切な言葉をとおして投映するに違いない。また、子ども自身の生活体験を振り返ることで、解決方法を探し出すと思われる。特に、場面1はＰ－Ｆスタディ全体の第１図版ということもあり、子どもに内在する深層を知るにはかなり重要な位置を占め、投映法検査として大きな手掛かりを与えてくれるものと思われる。

表5　場面1における評点因子の出現率（%）

評点因子	一般水準			期待水準			非期待水準			有意差（全体）
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	
E'	15.7	31.1	23.3	0	1.2	0.6	8.4	0	4.2	
E	48.8	44.5	46.7	1.2	2.4	1.8	46.4	72.6	59.4	**
e	11.4	8.5	10.0	4.2	3.0	3.6	39.2	22.0	30.6	
I'	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
i	1.8	1.2	1.5	18.1	11.0	14.5	0	2.4	1.2	
M'	0	0	0	3.6	0	1.8	0	0	0	
M	9.6	3.7	6.7	31.3	32.9	32.1	2.4	0	1.2	*
m	11.4	11.0	11.2	38.0	42.1	40.0	0	0.6	0.3	*
U	1.2	0	0.6	4.6	7.3	5.5	3.6	2.4	3.0	

* $p<.05$，** $p<.01$

表6　場面1における評点カテゴリーの出現率（%）

評点カテゴリー	一般水準	期待水準	非期待水準	有意差
	男女全体	男女全体	男女全体	(全体)
E－A	80.0	6.1	94.2	**
I－A	1.5	14.5	1.2	
M－A	17.9	73.9	1.5	***
O－D	23.3	2.4	4.2	
E－D	53.3	33.9	60.6	
N－P	22.7	58.2	32.1	
U	0.6	5.5	3.0	

** $p<.01$，*** $p<.001$

場面1は、特別な条件がなければ、子どもが通常に反応する一般水準として、評点因子別では「E'」「E」「e」などの他責（E－A）、なかでも相手を責める「E」（他罰）や、その状況に当惑する「E'」（他責逡巡）が多い。子どもは、母親が期待するであろうと認識する反応水準として、「M」「m」に代表される無罰（M－A）を表現しやすい。つまり「わかった」「じゃあがまんする」「今

度にするよ」のような時間の経過や社会規範に従う「m」反応(40.0%)、「大丈夫だよ」「平気」「気にしないで」といったように、母親からの不当な扱い方でもそれを許容する「M」反応(32.1%)が母親の望んでいる態度であると考える。子どもは、母親の言動を素直に認めて我慢することが求められていると理解するようである。

子どもが認める母親が期待しない反応は、自分を欲求不満に陥れた母親の不平等な扱いに「なんでよ、ひどい」「最悪、最低」「私のことも考えてよ」「兄さんばかりずるい」などと、母親や兄を非難・攻撃する「E」反応(59.4%)が多い。また「今すぐ買ってきて」「じゃあ買ってこいよ」のように母親の行動を非難し、欲求不満事態を母親の行動により解決させようとする「e」反応(30.6%)に出現する。これらの傾向は、母親自身による非期待水準(藤田、1986)や中学生の非期待水準(藤田、2020)と類似である。「e」反応が子どもに高い傾向にあることを考え合わせると、母親自身は自分が攻撃されることに敏感だが、子どもはそれとともに解決を相手に強要することを母親は好ましく思わないと考えている。このように、場面1では子どもから見た母親の期待水準は無責(M－A)であり、通常の対話状態で発言しやすい他責(E－A)は、決して期待されないという現実を子どもは理解している。

2）場面4

場面4は、自我阻碍場面である。子どもは、母親から「私には自動車が直せない」と困惑の姿を示される。表7は評点因子の出現率、表8は個々の評点をアグレッションの方向と型に分類してまとめたものである。子どもが認める母親の期待水準は、無責(M－A)と自我防衛(E－D)、欲求固執(N－P)にほぼ半数の評点が集中する。具体的には、「わかった」「気にしないで」「ぜんぜん大丈夫」と母親が直せないことを許す「M」反応(38.8%)、「自分で直してみる」「自分でがんばってみる」という自発的な努力によって欲求不満を解決しょうとする「i」反応(23.3%)などである。母親自身の期待水準が大きく「e」反応と「i」反応と分離していたのに対し、一般水準での回答を除くと、子どもの場合は「お父さんに直してもらう」のような他者へ依存する「e」反応(6.1%)は少ないのが特徴である。母親は誰か他者(特に父親)に依存したり、子どもの自発的努力に期待をかけたりするが、子ども自身は、母親が許容や他者へ依存しない態度を望んでいると考える。この傾向は、中学生の結果も同様であった(藤田、2020)。

表7　場面4における評点因子の出現率(%)

評点因子	一般水準			期待水準			非期待水準			有意差
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	(全体)
E'	27.7	32.9	30.3	3.6	0	1.8	1.2	3.7	2.4	*
E	12.0	9.8	10.9	1.2	3.7	2.4	34.9	40.9	37.9	*
e	28.9	26.2	27.6	6.6	5.5	6.1	57.8	51.8	54.8	*
I'	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
I	0	2.4	1.2	1.8	10.4	6.1	0	0	0	

i	3.6	4.9	4.2	27.1	19.5	23.3	0	0	0	*
M'	7.2	1.2	4.2	7.2	1.2	4.2	0	0	0	
M	16.9	21.3	19.1	38.0	39.6	38.8	2.4	2.4	2.4	*
m	2.4	1.2	1.8	12.0	18.9	15.5	0	0	0	
U	1.2	0	0.6	2.4	1.2	1.8	3.6	1.2	2.4	

$*p<.05$

表8　場面４における評点カテゴリーの出現率（%）

評点カテゴリー	一般水準	期待水準	非期待水準	有意差
	男女全体	男女全体	男女全体	(全体)
E－A	68.8	10.3	95.2	**
I－A	5.5	29.4	0	*
M－A	25.2	58.5	2.4	**
O－D	34.5	6.1	2.4	*
E－D	31.2	47.3	40.3	
N－P	33.6	44.8	54.8	
U	0.6	1.8	2.4	

$*p<.05$，$**\ p<.01$

一方、子どもが認める母親の非期待水準は、「E」反応と「e」反応で全体の92.7%を占めている。「E」反応は、自動車を直せない母親の力量を非難・攻撃するもので、例えば「こんなのも直せないのか」「役立たず」「お母さんが壊したでしょ」のように、子どものイライラを直接ぶつける言い方や、母親自身の自我を傷つけるような言い回し、母親への失礼な言い方など、一度は母親の落ち度を強烈に指摘してみたいという子ども願望がよく現れている。「e」反応は、「新しいのを買って」「早く直してよ」の反応がほとんどで、「他者（お父さん）に直してもらおう」という他者依存の反応は少ない。いずれにしても、非期待水準は「母親に悪口を言い、辛く当たる」ということである。母親自身が回答した非期待水準では「捨てる」という行動を嫌っていたが、子どもの母親像にはそれは少ない傾向であった。

3）場面７

場面７は、超自我阻碍場面である。子どもは、母親から「母親の花を摘んだ」ことを咎められている。表９は評点因子の出現率、表10は個々の評点をアグレッションの方向と型に分類してまとめたものである。欲求不満に対処する解決行動として、子どもが認める母親の期待水準は、「U」反応を除くと、自責（I－A）に100%すべてが含まれた。それは、自分の非を詫びる「I」反応（33.6%）と、弁明的な言い訳を付加して自我を守ろうとする「I」反応（31.2%）、徹底した償いやその目標への努力を意味する「i」反応（30.3%）に分かれる。「I」反応は、「ごめんなさい」がほとんどである。「I」反応は、「お母さんにあげたかったから」「とてもキレイだったから」と

いう言い訳を含んだ理由を話すことで、母親の表情が和らぐことを意図するかのようである。いずれにしても、「お詫び」「母親が喜ぶ理由付け」「償い」が大切なのであろう。

表9　場面7における評点因子の出現率（%）

評点因子	一般水準			期待水準			非期待水準			有意差
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	(全体)
E'	1.2	2.4	1.8	0	0	0	0	0	0	
E	19.3	15.2	17.3	0	0	0	86.7	78.7	82.7	***
E	2.4	0	1.2	0	0	0	3.6	0.6	2.1	
e	2.4	0	1.2	0	0	0	0	1.8	0.9	
I'	1.8	0	0.9	3.6	1.2	2.4	1.2	0	0.6	
I	54.2	34.1	44.2	36.1	31.1	33.6	1.2	0	0.6	*
I	17.5	37.2	27.3	23.5	39.0	31.2	4.8	14.0	9.4	
i	0	4.9	2.4	31.9	28.7	30.3	0.0	1.2	0.6	*
M'	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
M	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
m	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
U	1.2	6.1	3.6	4.8	0	2.4	2.4	3.7	3.0	

*$p<.05$，***$p<.001$

表10　場面7における評点カテゴリーの出現率（%）

評点カテゴリー	一般水準	期待水準	非期待水準	有意差
	男女全体	男女全体	男女全体	(全体)
E－A	21.5	0	85.8	***
I－A	74.8	97.6	11.2	**
M－A	0	0	0	
O－D	2.7	2.4	0.6	
E－D	90.0	64.8	94.8	
N－P	3.6	30.3	1.5	*
U	3.6	2.4	3.0	

*$p<.05$，**$p<.01$，***$p<.001$

これに対して、子どもが認める母親の非期待水準は、他責（E－A）と自我防衛（E－D）が圧倒的に高率である。それは、「花を摘んだ」という自分の行為を「別にいいじゃん」「何が悪いのよ」「うるさいなあ」「ケチ」などの雑言を吐くことで自分を守ろうとすることであり、実際に言いやすい悪口ではあるが、子ども自身もこの言い方は望ましいとはいえないと考えている。また、同じ「I」反応であっても、母親が喜ぶことを前提にして「プレゼント」を持ち出す言い訳は好まれ、

「私は悪い子じゃない」「お母さんの花だとは知らなかった」のような強く否認する言い方（「E」反応）は好まれない。ある女子児童は、「ごめんなさい。とてもきれいだったから。でも、お母さんの方がきれいだね」と、自分が非難されない口実を模索し、表面上は自己弁明の言い訳であっても、母親に向かって女子（右側人物）らしい性役割を表現するのであれば、きっと期待されるのであろうと考えているのかもしれない。ある男子児童は、「おめーの花じゃないんだよ。花があせ水かいてせっかく育った花なんだぞ。これはみんなの花だ。それを『私の花をつんだりして』だって〜。ふざけんな、このくそババア」と抑えきれない気持ちを力一杯述べ、自分の正当性を主張しているかのようである。

4）場面10

場面10は、自我阻碍場面である。母親が子どもに「悪いことをした罰に外に閉め出した」ことを詫びている。表11は評点因子の出現率、表12は個々の評点をアグレッションの方向と型に分類してまとめたものである。欲求不満に対する解決行動として、子どもが認める母親の期待水準を確認すると、全体の「I」反応は51.2％であるが、男子（38.0％）に比較すると女子（64.6％）の方が高い。「i」反応を含める自責（I－A）は全体の70.3％、相手を許容する無責（M－A）を加えると97.6％になり、大部分を説明できる。「I」反応は、「ごめんなさい」「私が悪かった」など、「i」反応は「もう悪いことはしません」など、「M」反応は「気にしなくていいよ」などを意味し、母親の行為を許し、無意図的で理屈のない謝罪と将来への約束を誓うものである。これは母親自身の水準（藤田、1986）と類似傾向にあり、母親の役割期待と子どもの被役割期待に合致するところが多いと言える。

表11　場面10における評点因子の出現率（％）

評点因子	一般水準			期待水準			非期待水準			有意差
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	(全体)
E’	7.8	8.5	8.2	1.2	0	0.6	10.8	12.2	11.5	
E	16.9	13.4	15.2	0	0	0	71.1	76.2	73.6	＊＊＊
E̲	0	0	0	0	0	0	2.4	4.9	3.6	
e	4.2	2.4	3.3	0	0	0	6.0	4.3	5.2	
I’	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
I	22.9	25.0	23.9	38.0	64.6	51.2	0	0	0	＊＊
i	2.4	6.1	4.2	20.5	17.7	19.1	0	0	0	
M’	3.6	0	1.8	2.4	0	1.2	1.2	0	0.6	
M	30.1	32.3	31.2	35.5	16.5	26.1	6.0	2.4	4.2	
m	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
U	12.0	12.2	12.1	2.4	1.2	1.8	2.4	0	1.2	

＊＊ $p<.01$，＊＊＊ $p<.001$

表12　場面10における評点カテゴリーの出現率（%）

評点カテゴリー	一般水準	期待水準	非期待水準	有意差
	男女全体	男女全体	男女全体	(全体)
E－A	26.7	0.6	93.9	***
I－A	28.2	70.3	0	***
M－A	33.0	27.3	4.8	
O－D	10.0	1.8	12.1	
E－D	70.3	77.3	81.5	
N－P	7.6	19.1	5.2	
U	12.1	1.8	1.2	

*** $p<.001$

一方、子どもが認める母親の非期待水準は、圧倒的に他責（E－A）反応で全体の93.9%を占めている。すなわち、理由はともかく自分を外に閉め出した母親を直接に非難・攻撃して、「悪かったと思うならするな」「許さないから」「お母さんひどい」などという「E」反応が優意に高い。また、「ほんとうだよ」「寒かった」という「E'」反応、「悪いことなんかしていない」という「E」反応、「早く中に入れてよ」という「e」反応も見られた。「E」反応には、ここぞとばかりに思いっ切り汚い言葉を選択し、「ふざけんなよ、このババア」」「お母さんなんて大嫌い、最低」「虐待だと訴えてやる」「ふざけんじゃねぇよ、おまえもやられてぇのか、クズ」などと攻撃する。小学生や中学生に関わらず、しかも男子と女子に共通である。しかし、実際にはできないであろうが、このような言い方を学習してきたこと、非日常であるがゆえに想起できる表現願望が根底にあること、日常の母－子関係の姿の背後にある子どもたちの不満などを知ることができる。

5）場面15

場面15は、自我阻碍場面である。子どもの「ケガの状態」を母親が尋ねている。表13は評点因子の出現率、表14は個々の評点をアグレッションの方向と型に分類してまとめたものである。この場面の欲求不満に対する解決行動として、子どもが認める母親の期待水準は、自責（I－A）や無責（M－A）が中心で、アグレッションの型は障害優位（O－D）である。これは母親の心配を和らげようとする意図を含んで「大丈夫だよ」「平気だよ」「安心して」「心配してくれてありがとう」などと答え、ケガをしたかもしれない状況を抑えて母親に安心感を与え、ときにはケガを完全否定する「I'」反応を表出する。子どもは、母親が自分の無事を願う気持ちがあることを分かっていると見てよいだろう。すなわち、母親を心配させる言動は望ましくないのである。階段から落ちたときの悲痛な叫びを強調する「痛い」「ケガをした」などの「E'」反応や、「うっかりしてた」「自分のせいだ」のように、自分の不注意を肯定する「I」反応は少なく、母親が期待する答え方を想定した水準であることに意味がある。

表13　場面15における評点因子の出現率（%）

評点因子	一般水準			期待水準			非期待水準			有意差
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	(全体)
E’	30.1	23.8	27.0	1.2	0.6	0.9	16.3	23.2	19.7	
E	4.2	1.2	2.7	0	1.2	0.6	55.4	48.2	51.8	***
e	1.2	1.2	1.2	0.6	0.6	0.6	10.8	7.9	9.4	
I’	25.9	42.7	34.2	55.4	66.5	60.9	12.7	12.8	12.7	
I	0	0.6	0.3	7.2	7.3	7.3	0	0	0	
i	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
M’	38.6	28.0	33.3	33.1	23.8	28.5	0	4.3	2.1	
M	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
m	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
U	0	2.4	1.2	2.4	0	1.2	4.8	3.7	4.2	

*** $p<.001$

表14　場面15における評点カテゴリーの出現率（%）

評点カテゴリー	一般水準	期待水準	非期待水準	有意差
	男女全体	男女全体	男女全体	(全体)
E－A	30.9	2.1	80.9	***
I－A	34.5	68.2	12.7	*
M－A	33.3	28.5	2.1	
O－D	94.5	90.3	34.5	
E－D	3.0	7.9	51.8	**
N－P	1.2	0.6	9.4	
U	1.2	1.2	4.2	

* $p<.05$，** $p<.01$，*** $p<.001$

これに対して、子どもが認める非期待水準の反応は、他責（E－A）である「E」反応、「E’」反応、「e」反応の順に出現し、全体では80.9%になる。つまり、「E」反応は「おまえが押した」「お母さんのせいだ」「いちいちうるさい」など、「E’」反応は「痛い」「足をくじいた」など、「e」反応は「早く助けて」「早く病院へ連れていって」という一連の応答進行に結びつく内容である。子どもは、母親の不手際を非難・攻撃すれば、母－子の関係が悪化し、さらに母親に好まれない方向へ進んでしまうことを十分に承知している。ただ、これも比較の対象になるが、母親自身は「E’」反応のように単に「痛い」と強調するだけの反応を嫌い（藤田、1986）、子どもは母親以上にはそのように感じていないと言える。この言動は小学生に限らず、中学生でも同様であった（藤田、2020）。

6）場面16

場面16は、自我阻碍場面である。母親が「ボールをとった小さい子ども」を非難している。

表15は評点因子の出現率、表16は個々の評点をアグレッションの方向と型に分類してまとめたものである。欲求不満に対する対処行動として、子どもが認める母親の期待水準は無責（M－A）の方向（82.7%）、自我防衛（E－D）の型（57.0%）である。例えば「小さい子だから仕方ないよ」「この子は悪くない」のように、ボールを取った小さい子どもに対して、「小さいから分からなかったのだ」と明らかに許容し、いわば常識的反応とも受け取れる「M」反応が52.4%を占める。母親にとって好ましいのだろうと考える「M」反応や、「大丈夫だよ」「そのボールあげるよ」のような「M'」反応（26.7%）が見られるのは、所与の欲求不満事態をまったく不可避的な状況と見なして、小さい子どもを許容する「思いやり」の気持ちを持つことを、子ども自身が母親の中に投映していると考えられる。

表15　場面16における評点因子の出現率（%）

評点因子	一般水準			期待水準			非期待水準			有意差
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	(全体)
E'	1.2	4.9	3.0	0	0	0	1.2	0	0.6	
E	30.1	24.4	27.3	2.4	3.0	2.7	51.8	59.1	55.5	*
e	6.0	8.5	7.3	2.4	0	1.2	25.3	28.7	27.0	
I'	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
I	1.8	1.2	1.5	1.2	2.4	1.8	0	0	0	
i	0	1.2	0.6	1.2	1.2	1.2	0	0	0	
M'	18.1	12.2	15.2	31.3	22.0	26.7	1.2	2.4	1.8	
M	28.3	40.2	34.2	46.4	58.5	52.4	7.2	2.4	4.8	*
m	0	1.2	0.6	1.8	5.5	3.6	0	0	0	
U	14.5	6.1	10.3	13.3	7.3	10.3	13.3	7.3	10.3	

* $p < .05$

表16　場面16における評点カテゴリーの出現率（%）

評点カテゴリー	一般水準	期待水準	非期待水準	有意差
	男女全体	男女全体	男女全体	(全体)
E－A	37.6	3.9	83.0	***
I－A	2.1	3.0	0.0	
M－A	50.0	82.7	6.7	**
O－D	18.2	26.7	2.4	
E－D	63.0	57.0	60.3	
N－P	8.5	6.1	27.0	
U	10.3	10.3	10.3	

** $p < .01$,　*** $p < .001$

一方、子どもが認める母親の非期待水準は、「E」反応と「e」反応で全体の82.5%を占める。この場面も圧倒的に他責（E－A）である。E反応は「私のボールを取って許さない」「親の教育がよくない」などの非難、「e」反応は小さい子どもや母親に対して「早く返せよ」「早く取り返せよ」といった強い要求である。子どもは欲求不満を自分以外の対象（母親や小さい子ども）に固定して振り向けることにより、自我を防衛したり、防衛の手段を求めたりするのである。さらに興味深い点は、本研究結果だけでなく、母親自身（藤田、1986）、また中学生の母親像（藤田、2020）も共に「I'」反応、「I」反応、「i」反応の自責（I－A）をまったく認めていないことである。なお本研究では、「U」反応が10%を超えた。これは、場面を誤認した結果（例：母親や小さい子どもとして答えてしまう）であり、スコアすることができなかった。

7）場面17

場面17は自我阻碍場面である。子どもが「寝ていること（留守番）」を母親から要求される。表17は評点因子の出現率、表18は個々の評点をアグレッションの方向と型に分類してまとめたものである。欲求不満場面に対する子どもから見た母親の期待水準は、無責（M－A）に集中し、自我防衛（E－D）と要求固執（N－P）で全体の90%を超える傾向であった。無責（M－A）は、「いい子にしているよ」「わかった、ちゃんと寝ているよ」に代表される「m」反応、「行ってらっしゃい」「楽しんできてね」などの「M」反応がその例である。子どもは母親の要求（寝ていること）に素直に従うこと、母親に別行動（例：お土産を買う）を要求しないことが、母親の好む態度であると考えている。母親の指示や依頼に文句を言わないで受け入れる態度を示すこと、母親を気遣う言葉を投げかけることこそ、子どもが母親との関係を穏やかに過ごす手段だと感じているようである。これは中学生の結果とも一致している（藤田、2020）。

表17　場面17における評点因子の出現率（%）

評点因子	一般水準			期待水準			非期待水準			有意差
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	(全体)
E'	1.2	3.7	2.4	0	0	0	0	3.7	1.8	
E	10.8	11.0	10.9	0	1.2	0.6	76.5	64.0	70.3	***
e	11.4	4.9	8.2	2.4	3.7	3.0	12.7	23.2	17.9	
I'	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
i	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
M'	4.8	3.0	3.9	0	0	0	1.8	0.6	1.2	
M	7.8	18.9	13.3	19.3	40.9	30.0	0	2.4	1.2	
m	62.7	54.9	58.8	73.5	51.8	62.7	4.2	3.7	3.9	**
U	1.2	3.7	2.4	4.8	2.4	3.6	4.8	2.4	3.6	

** $p<.01$,　*** $p<.001$

表18　場面17における評点カテゴリーの出現率（%）

評点カテゴリー	一般水準	期待水準	非期待水準	有意差
	男女全体	男女全体	男女全体	(全体)
E－A	21.5	3.6	90.0	＊＊＊
I－A	0	0	0	
M－A	76.1	92.7	6.4	＊＊
O－D	6.4	0.0	3.0	
E－D	24.2	30.6	71.5	
N－P	67.0	65.8	21.8	
U	2.4	3.6	3.6	

＊＊ $p<.01$,　＊＊＊ $p<.001$

これに対して、子どもが認める母親の非期待水準は、「E」反応、「e」反応、「E'」反応という他責（E－A）で90.0%になる。子ども一人を置いていく母親（しかも寝ていることを要求）に対して、「なんで寝てなきゃいけないんだ」「さっさと出ていけ」「一生帰ってくるな」「ゲームやるからぜったい寝ない」「僕も行きたい」と表現されるように、母親の勝手な行動を非難したり、一方的な要求に戸惑い拒否したりする態度は、子ども自身も分かっているものの、「母親は、おそらくこうあってほしいと思うのだろう」という気持ちの裏返しのようである。その場合、その気持ちは母親の意志や命令に素直に従わなかったり、どちらかと言えばわがままな言動を取りやすかったりする。また、「お母さんは、ぼくよりお父さんの方が大事なんだ」という皮肉のような発言も出てくる。これは子どもの目に映る母親像として理解されるものであり、母親と子どもの役割が見事に描かれていると言えるかもしれない。

8）場面19

場面19は、超自我阻碍場面である。母親から「寝小便」をしたことに対し、弟と比較されて叱られている。表19は評点因子の出現率、表20は個々の評点をアグレッションの方向と型に分類してまとめたものである。欲求不満の解決行動として、子どもから見た母親の期待水準は自責（I－A）に集中（94.0%）し、有意に高率で、男女ともほぼ同傾向である。特徴的なのは、「ごめんなさい」と素直に謝る「I」反応（34.2%）以上に、「これから気をつけます」「次からおねしょしません」「自分で洗います」のように、以後の自発的努力を決意して母親に誓う「i」反応の方が高率（57.0%）ということである。母親自身の期待水準がこの両反応に等しく出現（母親にとっては基本的に謝罪である）したのに対し、子どもの出現率は「i」反応に高い。これは、おそらく子どもが、自分の行為（寝小便）を認めて「ごめんなさい」と謝るだけでは許されない今までの日常生活があり、母親から「それでは、これからどうするのか」「約束しなさい」という詰問に応えざるを得ない現実を十分に認識しているものと思われる。

表19　場面19における評点因子の出現率（%）

評点因子	一般水準			期待水準			非期待水準			有意差
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	(全体)
E’	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
E	31.3	18.9	25.2	1.2	1.2	1.2	84.3	81.1	82.7	
E̲	4.8	2.4	3.6	0.0	2.4	1.2	4.8	7.3	6.1	＊＊＊
e	0	0	0	0	0	0	4.8	3.7	4.2	
I’	2.4	2.4	2.4	0	0	0	0	0	0	
I	47.6	57.3	52.4	34.3	34.1	34.2	0.0	2.4	1.2	＊
I̲	4.8	8.5	6.7	0	5.5	2.7	2.4	0.6	1.5	
i	5.4	9.1	7.3	59.6	54.3	57.0	0.0	1.2	0.6	＊＊＊
M’	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
M	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
m	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
U	3.6	1.2	2.4	4.8	2.4	3.6	3.6	3.7	3.6	

＊$p<.05$，＊＊ $p<.01$，＊＊＊ $p<.001$

表20　場面19における評点カテゴリーの出現率（%）

評点カテゴリー	一般水準	期待水準	非期待水準	有意差
	男女全体	男女全体	男女全体	(全体)
E－A	28.8	2.4	93.0	＊＊＊
I－A	68.8	94.0	3.4	＊＊＊
M－A	0	0	0	
O－D	2.4	0	0	
E－D	87.9	39.4	91.5	
N－P	7.3	57.0	4.9	＊＊
U	2.4	3.6	3.6	

＊＊ $p<.01$，＊＊＊ $p<.001$

一方、子どもが認める母親の非期待水準は、他責（E－A）であり自我防衛（E－D）である。それは「うるさい、お前もやったことあるだろう」「弟と比べんじゃねーよ」「しょうがないじゃん」という「E」反応が82.7%である。また、「僕はしていない」という「E̲」反応も若干であるが認められた。いわゆる無礼で失礼な言語反応だけでなく、行為否定（E̲）や、「暗くてトイレ行けなかったんだ」という言い訳（I̲）も母親から好まれない言い方である。なお、母親自身へ問いかけた期待水準と非期待水準の結果（藤田、1986）では、「何も言わない」「泣く」「いじける」といったいわば消極的態度が否定されていたが、子どもは場面によっては言語等で応対すること自体が母親に望まれない原因と考えることがあるようだ。しかしここではその種類の記述は認められなかった。この点も、中学生の結果（藤田、2020）と類似であった。

9）場面23

場面23は、自我阻碍場面である。母親が「おつゆが冷めてしまった」ことを子どもに詫びている。表21は評点因子の出現率、表22は個々の評点をアグレッションの方向と型に分類してまとめたものである。欲求不満に対する子どもから見た母親の期待水準は、評点因子別では、無責（M－A）への反応が87.9%で、「冷めてもおいしいよ」「大丈夫だよ」などの「M'」反応56.4%、「気にしないで」などの「M」反応31.5%にほとんどの回答が集中する。中学生を対象とした結果（藤田、2020）では、無責（M－A）97.4%であったので、ここは発達的な問題が影響しているのかを検討する必要があるだろう。例えば「もう一度温めて」のような形をとる「e」反応は、女子に1例の記述が認められただけである。何らかの解決法を母親に強要する仕方は、少なくとも子ども自身にとって現実の母親像と一致していないと言える。「M'」反応や「M」反応で9割近くが占められているのは、自分の欲求不満を抑えることが解決方法として最良であり、またそのような形で慰めてもらいたい母親像を描いているからであろう。

表21　場面23における評点因子の出現率（%）

評点因子	一般水準			期待水準			非期待水準			有意差
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	(全体)
E'	4.8	7.3	6.1	0	0	0	12.0	13.4	12.7	
E	24.1	8.5	16.4	0	0	0	54.2	40.9	47.6	**
e	16.9	3.7	10.3	0	1.2	0.6	30.1	43.3	36.7	*
I'	0	0	0	4.8	0	2.4	0	0	0	
I	1.2	0.6	0.9	3.6	1.2	2.4	0	0	0	
i	0	1.2	0.6	4.8	4.9	4.8	0	0	0	
M'	21.7	45.7	33.6	38.6	74.4	56.4	0	0	0	**
M	22.9	31.7	27.3	45.8	17.1	31.5	0	0	0	
m	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
U	8.4	1.2	4.8	2.4	1.2	1.8	3.6	2.4	3.0	

* $p<.05$,　** $p<.01$

表22　場面23における評点カテゴリーの出現率（%）

評点カテゴリー	一般水準	期待水準	非期待水準	有意差
	男女全体	男女全体	男女全体	(全体)
E－A	32.7	0.6	97.0	***
I－A	1.5	9.7	0	
M－A	60.9	87.9	0	***
O－D	39.7	58.8	12.7	
E－D	44.5	33.9	47.6	
N－P	10.9	5.5	36.7	
U	4.8	1.8	3.0	

*** $p<.001$

一方、これは極めて特徴的と言えるが、子どもが認める母親の非期待水準は、全体の97%が有意に他責（E－A）で占められ、「U」反応を除けば男女とも100%である。それは、「こんな冷たいおつゆが飲めるか」「お前のせいだろう」などの「E」反応と、「作りなおして」「温めなおして」などの「e」反応、「冷たい」「まずい」などの「E'」反応である。この場面で自分が優位に立ったと認知し、ここぞとばかりに母親のミスを指摘（他罰）しながら、自分の立場を必死で守ろうとする姿（自我防衛）が垣間見られる。先に記述したように、母親自身の結果では、自分への非難・攻撃を回避する傾向を持つが、子どもは母親へ強要したり、依頼や依存の方法を選択したりすることを避ける（期待されない）様子が明らかになったと言える。

8　要 約

本研究は、欲求不満と攻撃性の問題について、Rosenzweigが創始したP－Fスタディを基に大きく2つの方向から検討した。1つは、P－Fスタディの投映法検査としての構成や測定の在り方、解釈等についての考察である。2つは、P－Fスタディ児童用（Ⅲ版）の中から選択された母－子場面（全9場面）を材料に、小学校5年生の男女児童165名に対して、彼らの反応水準を「期待水準」という観点から3方向に求めた。すなわち、小学生の欲求不満行動における一般的な反応水準（一般水準）、母親が期待する反応水準（期待水準）、母親が期待しない反応水準（非期待水準）の3種類である。得られた主要な結果は、以下のとおりである。

(1) 特定の場面に特定の評点因子の存在が認められ、また、「期待水準」「非期待水準」に特徴的な評点因子の存在が認められた。

(2) 母－子場面全体で出現しやすい評点因子は、子どもから捉えた母親の「期待水準」では、「M」「I（<u>I</u>）」「i」「m」の各評点因子、母親の「非期待水準」では、「E（<u>E</u>）」「e」「E'」の各評点因子であった。

(3) 小学生が捉えたP－Fスタディ母－子場面における母親の「期待水準」と「非期待水準」に出現する評点因子および評点カテゴリー（アグレッションの方向と型）の比率は、それぞれの場面ごとに特徴的な値を示した。

このような諸結果から、欲求不満場面への対処の仕方として、子ども自身が描く母親像は、概して母親に好まれる（期待される）アグレッション方向が自責（I－A）あるいは無責（M－A）で、アグレッション型は3方向に分散する。また、概して母親に好まれない（期待されない）アグレッション方向は他責（E－A）で自我防衛（E－D）であることが明らかになった。

本研究によるこのような事実は、P－Fスタディによるパーソナリティの理解、さらに母子関係の臨床的解釈において重要な知見を提供するものと思われる。

（本学講師＝教職課程担当）

【引用文献】

Bell,R.B. and Rosenzweig,S.（1965）. The investigation of projective distance with special reference to the Rosenzweig Picture-Frustration Study. *Journal of Projective Techniques and Personality Assessment,* 29, pp.161-167.

Dollard, J., Doob, L., Miller, N.E., Mowrer, O.H., & Sears, R.R. (1939). Frustration and aggression. New Haven : Yale University Press. 宇津木保訳（1959）欲求不満と暴力　誠信書房.

藤田主一（1986）．Ｐ－Ｆスタディ母－子場面における母親の期待水準に関する比較研究　城西大学女子短期大学部紀要，3，1，pp.57-70.

藤田主一（1990）．心理学教科書とＰ－Ｆスタディ　城西大学女子短期大学部紀要，7，1，pp.129-140.

藤田主一（1991）．心理学教科書に扱われたとＰ－Ｆスタディの現状と課題―特に，教育心理学教科書を中心に―　城西大学女子短期大学部紀要，8，1，pp.161-182.

藤田主一（1995）．Ｐ－Ｆスタディ母 - 子場面における刺激構造の検討　城西大学女子短期大学部紀要，12，1，pp.119-128.

藤田主一（1997）．Ｐ－Ｆスタディにおける不明確語の研究－特に，成人用「なんで」反応の意味と解釈について－　城西大学女子短期大学部紀要第，14，1，pp.29-40.

藤田主一（1998）．Ｐ－Ｆスタディにおける不明確語の研究－特に，青年用に見られるＵ反応の意味構造について－　城西大学女子短期大学部紀要，15，1，pp.1-15.

藤田主一（2020）．Ｐ－Ｆスタディ母－子場面における期待水準に関する研究　商学集志，90，1，pp.389-418.

原野広太郎・江川玫成・渡辺三枝子（1970）．Ｐ－Ｆスタディによる児童の教師観の研究　相談学研究，4，1，pp.1-7.

秦　一士（1974）．Ｐ－Ｆスタディにおける児童の人物認知と言語反応の関係　日本心理学会第38回大会発表論文集，pp.510-511.

秦　一士（1987）．日本におけるＰ－Ｆ Studyの研究－文献目録－　甲南女子大学人間科学年報，12，pp.73-92.

秦　一士（1992）．Ｐ－Ｆスタディ　臨床心理学体系，第6巻，人格の理解⑥　金子書房，pp.175-195.

秦　一士（1993）．Ｐ－Ｆスタディの理論と実際　北大路書房.

秦　一士（1996）．日本におけるＰ－Ｆスタディの研究－文献目録－　甲南女子大学人間科学年報，21，pp.23-31.

秦　一士（2007）．新訂P-Fスタディの理論と実際　北大路書房.

秦　一士（2010）．Ｐ－Ｆスタディアセスメント要領　北大路書房.

秦　一士・安井知己（2013）．Ｐ－Ｆスタディ　津川律子（編）『投映法の基礎講座』所載，遠見書房，pp.128-138.

秦　一士（2019）．Ｐ－Ｆスタディの実際　2019年度Ｐ－Ｆスタディ講習会（アドバンスコース）配布資料，東京Ｐ－Ｆスタディ研究会，pp.1-14.

秦　一士・安井知己・青木佐奈枝・木村一朗・笹川宏樹・鈴木常元・西尾　博・沼　初枝・藤田主一（2020）．Ｐ－Ｆスタディ解説（2020年版）　三京房.

林　勝造・一谷 彊・小嶋秀夫（1963）．親に対する子どもの認知像の検査法－CCP解説－　大成出版.

林　勝造（1985）．　ローゼンツァイクＰ－Ｆスタディ　精神科MOOK，No.10，心理検査法　金原出版，pp.77-88.

林　勝造・一谷 彊・秦 一士他（2007）．Ｐ－Ｆスタディ解説（2006年版）　三京房・

久芳忠俊（1959）．母親－子供罰場面における攻撃的方向と型について　心理学評論，3，pp.74-84.

伊藤　進（1979）．子供の反応についての母親の予測－PFTを用いた分析－　日本心理学会第43回大

会発表論文集，p.741.
駒崎　勉（1985）．パーソナリティの本質　駒崎勉著『新訂 パーソナリティの心理学』所載，pp.15-33，八千代出版.
駒崎　勉（1992）．パーソナリティとは何か　駒崎勉著『人間研究の心理学：パーソナリティの問題を中心に』所載，pp.11-29，八千代出版.
Morgan,P.K. and Gaier,E.L.（1956）．　The Direction of Aggression in the Mother-Child Punishment Situation. Child Development，Vol. 27, No. 4 (Dec., 1956)，pp. 447-457。
Rosenzweig,S.（1945）．The picture-association method and its application in a study of reaction to frustration. *Journal of Personality*，14，pp.3-23.
Rosenzweig,S., Flemming,E.E. and Clarke,H.J.（1948）．The Children’s Form of the Rosenzweig Picture-Frustration Study. *Journal of Psychology*，26，pp.141-191.
Rosenzweig,S.,（1950）．Frustration tolerance and the Picture-Frustration Study. *Psychological Service Center Journal*, 2(2)，pp.109-115.
Rosenzweig,S.（1978a）．The Rosenzweig Picture-Frustration（P-F）Study Basic Manual. St.Louis：Rana House.
Rosenzweig,S.（1978b）．Aggression Behavior and Rosenzweig Picture-Frustration Study. New York：Praeger Publishers.（秦 一士訳 2006 攻撃行動とP-Fスタディ 北大路書房）
Rosenzweig,S.（1981）．Toward a Comprehensive Definition and Classification of Aggression. Ed. by D.F. Brain. and D.Benton. Multidisciplinary Approaches to Aggression Research. Bimedical Press，1981，pp.17-22.